



男声合唱組曲
「雪と花火」

I 片恋

II 彼岸花

III 芥子の葉

IV 花火

作詩
北原白秋
作曲
多田武彦
指揮
芋野一男

message

第44回リサイタルおめでとうございます。
松の内が明けて、正月のあのはなやいだ気分がだんだん薄れ、入れ替りに木枯が吹きささぶ冬の夜に、毎年、関西学院グリークラブの名演奏が聴かれます。こうした繰り返しが、もう四十数年、この関西にしみこんでしまっていることに、私は何とも云えぬ嬉しさをしみじみと感ずります。今から考えると、昭和34年1月初演の「中勘助の詩から」にも「追羽根」がありましたし、翌35年初演の「雪明りの路」にも「春を待つ」「夜まわり」「雪夜」など、1月の季節感をもりこんだ組曲に仕立てていたのも、この新年早々のリサイタルへの郷愁のせいだったのだなあ、と思われてなりません。

* * *
「雪と花火」は、私が昭和32年はじめて東京に棲んだとき作曲したもので、今から思うと、白秋のつけたもう一つの標題「東京景物詩」と何故つけなかったのだろうと反省しています。(この組曲の中には「雪」が一つも出てこないからです) しかしそれはそれとして、その頃、東京をむさぼり歩き、文献や写真集を読みあさって、六畳一間の冷たい部屋で夢中で書き綴った自分をなつかしく思い出します。

* * *
関学グリーの演奏会がすむと、私は毎年、二ヶ月先の早春を夢見ますが、そうした意味で、この歌声は春への序奏というべきでしょうか。だんだん年をとるにしたがって、毎年若い新しい世代へうけつがれ奏でられるこの歌声をきいて、逆に私は、今年が始まったのだな、と一層感ずるようになってきました。

今年もまた精一杯すばらしい男声合唱をきかせて下さい。演奏会のご成功、今年のご活躍と、今後のご発展を祈ります。

多田武彦

作曲家